



助け合い推進会議会長賞

『大塚先生の涙』

清水かほり （長野県信州新町）

中学校生活に馴染めず、思春期と言うものが重なり、心の壁を乗り越えられずにその壁に押しつぶされた私は心に大きな傷が出来てしまいました。

嘔吐とリストカットでその苦しみから逃れようとしたが脱水症状や貧血などに悩まされ、夜は眠れず昼間はただ布団に潜ったまま天井の木目やシミを見つめているきりで、時々窓の外を見ると広がる青い空やはばたく鳥たちがみんな涙と一緒に流れてしまうのではないかと思うくらい、とにかく毎日泣き続けていたのを今でも覚えています。そして、病状は改善されないまま悪化し、とうとう体重は33キロまで減ってしまいました。

やむなく近くの病院に通いつめるようになったのですが（生きることはなんて苦しいのだろう？）と生きるための理想や夢は砕けて、『死』と言う世界の憧れが日に日に募るようになり、その歯止めが利かなくなっていました。

しかし、それを見るに見かねてか、当時担当医であっ

た大塚先生が私の『生きている証』を意外な物で教えてくれたのです。それが、ひよこの絵がプリントされた聴診器でした。

ドキドキ、と言うよりはトクン、トクンと優しい音が聞こえ、「私は生きている。」と聴診器を通してそう思えるようになったのです。

「先生、ありがとう。」

そう言って聴診器を返そうとした時、大塚先生は無言のまま隣の診察室に行ってしまった。

気になった私は診察室のドアが少し開いていたので覗いてみると、大塚先生は目頭を押さえて涙を流していました。（私の悲しみなんてきっと誰も解ってくれない。）だけど目の前で泣いてくれる人がいることに気付いたその時は、（今まで自分がしてきた行為は、どれだけの人に悲しい想いをさせたのだろう。）と考えさせられました。他者と助け合うからこそ人は成り立つことが出来て、希望の道が開けるのです。

私の心の傷はまだ消えたわけではありません。でも、おかげでたくさんの教訓を得ることができました。

そして、色んな人との出会いが私を変えてくれました。

だから出会いには感謝しているし、私の心の叫びを一生懸命に理解しようとしてくれる人の中にいる今は、確か

に苦しい事もあるけれど、それでもやっぱりこの病気のおかげでたくさんの優しさを学ぶことができました。

「助けて。」

もっと早く素直にそう言えたら私は今、違う人生を送っていたでしょう。でも、過去を振り返っても、過ぎ去った時間を巻き戻しすることは出来ないのです。

辛い時は「助けて。」

そう言えた時、人はやっと心の中の苦しみから逃れられるのです。

トクン、トクン・・・。

今日も私は生きている。

